

英詩のリズム

東京女高師教授 曾根保

明治十五年に出版された『新體詩抄』の序文を見るにその一節に、

唐の横町の毛唐人が云ふには、「大凡物不得其平則鳴、草木之無聲、風撓之鳴、水之無聲、風蕩之鳴」云云、「人之於言也亦然、不得已而後言、其歌也有思、其哭也有懷、凡出乎口而爲聲者、其皆有弗平者乎」。我邦にも長歌だの三十一文字だの川柳だの支那流の詩だの、様々の鳴方ありて、月を見ては鳴り、雪を見ては鳴り、花を見ては鳴り、別品を見ては鳴り、矢鱈に鳴り散らすも十分に鳴り盡すこゝ能はず。

さあつて、外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎の三博士が従來の詩歌の形式を嫌はず思ひ、全然新しい詩形を創始せんとして革新運動を興された往時の氣慨が窺はれて愉快である。この詩集に盛られた作品が、詩としての程度まで

成功してゐるかは暫らく措き、今日われわれの所謂「詩」、即ち和歌、俳句に對立させて呼ぶ詩がこゝに起源をもつてゐることは、注目すべき事實であるが、その新しい詩形なるものが、英詩から輸入されたことも明白で、十九篇の作品中十三篇までが英詩の翻譯なのである。日本の現代の詩を歴史的に觀察する時、『新體詩抄』は極めて重要な役割を演ずるのであるが、又同時に英詩の影響をも考に入れなければならぬ。それはこゝにかくして、山仙士譯の「一里半なり一里半、並びて進む一里半、死地に乗り入る六百騎」の一篇は當時最も人口に膾炙した詩であるが、これに並んで尙今居士の『グレイ氏墳上感懷の詩』(Thomas Gray: *Elegy Written in a Country Churchyard*)も有名であり、又巧みな譯しぶりでもある。その冒頭の一節を引用してみよう――

山々かすみいりあひの 鐘はなりつゝ野の牛は

徐に歩み歸り行く 耕へす人もうちつかれ

やうやく去りて余ひりり たそがれ時に残りけり

原詩は

The curfew tolls the knell of parting day,

The lowing herd wind slowly o'er the lea,

The plowman homeward plods his weary way,

And leaves the world to darkness and to me.

こあつて、一行は譯詩では七五七、或は五七五の語數におさめてあり、調子が可成り速くなつてゐるが、それでも一くさり一くさりをゆつくり讀んで行くを、遠景から中景、近景を導かれ、靜かに暮れゆくたそがれの中にたゞ獨り佇んでゐる口を見るやうな感じがする。原詩の各行はテンポが甚だのろく、靜かに暮れゆく、さみしい氣持が横溢してゐる。その氣持をわれわれに與へるものは思想、即ち言葉のもつ意味なのであらうか、それとも何かそれを助けてゐるのであらうか。その美は決して意味だけからではない。嚴密に言へば、意味(sense)の音(sound)が投げ込まれた一種の形式にあるのである。グレイは賢明にもこの形式を

よく心得てゐた。言葉の意味だけが描き出すこの夕べの景色も、繪ミしては未完成のものであらう。又現代人には刺戟の足りない、古臭い骨董品として見えないかもしれない。しかし現代人に合ふ合はぬは別問題として、その音の醸し出す美によつて出来上つたこの夕景色は申分のない、黒色鮮やかな一幅の繪である。ミレーの『晚鐘』も想ひ出されるが、われわれ東洋人にはグレイの黄昏で十分満足出来るやうに思ふ。言葉の選擇、抜きさしならぬ措辭、さすがに推敲に推敲を重ねたほごあつて寸分の隙も無いやうである。試みに次の四行を聲を出して讀んでいただきたい。

The curfew tolls the knell of day,

The lowing herd wind o'er the lea,

The plowman homeward plods his way,

And leaves the darkened world to me.

これを原詩と比べてみるに、意味に於いて大した相違は無いが、第一つまつた感じがして、せましく、和やかに暮れゆく黄昏の氣持といふものが全く失はれてゐる。原詩は curfew tolls のいひ、又 tolls the knell のいつた風に寧ろ古めかしい言葉を重ねて、落ちついた氣持を出し、

第二行、第三行なごの音を巧妙に響かせて和やかさをもたせ、wの音さへもあしらつて意味の音が憎々しいほど

Tell me not in mournful numbers,
Life is but an empty dream.

に調和してゐる。即ち第二行にはwの音を忍ばせ、第三行にはwのかげにiの音を置いて次の行の leaves に移つて行くなご實に妙を得てゐる。又 plods にアクセントが落ちてゐるこも見逃せない。もしこの中で意味から、又音から言つて一番弱い言葉があるとしたら、 patting であるが、グレイはこれによつてももの靜かな氣持をねらつてゐるのであらう。又第一行の the knell が a knell であつたら、その次にわれわれは必然的に pause (休止) を置くのであるが、グレイは the knell として休止を許さない。又

は聲を出して讀むに、實に輕快なリズムを感じるが、それは餘りにも單調で、しかも落ちつきが無く、輕薄な調子にさへも聞える。筆者がその昔、中學生時代に愛誦したこの詩に近來甚だ物足りなさを覺えるに到つたのは、このリズムの淺薄さによるのではないかと考へられる。さて、グレイの『悲歌』の、音の方面に於いて注意すべき點は大體以上で盡きると思ふが、次に、初學者のためにいさゝか字句の解釋を施して置く。

第四行の leaves...to の間にも休止の餘地がないから、各行のリズムは途中で切れるこもなく行末まで流れてゆく。尚行末の音が交互に韻を踏んでゐるため、全體が更に音調よく、ゆつたりとした靜かなリズムにわれわれは魅せられるほごである。しかし、音だけが如何になだらかであつても、賞めたこではない場合もある。たゞはばロングフェローの有名な『人生讚歌』の初めの二行

curfew は古代フランス語の covre feu (= cover fire) から來た語で、昔焚火や燈火を消して就寝すべき合圖として、夜の八時か或は九時に鳴らされた鐘のこみであるが、こゝでは入相の鐘、或は晚鐘といふ意味である。今日では「カーフェ」こいふ言葉を聞けば必ずグレイの『悲歌』を想ひ起すこいふ程兩者の關係が密接になつてゐる。tolls は「鳴らす」。詩では現在形を以て進行形にも未來形にも代用するので、こゝでも「鳴らしてゐる」を言つてよい。knell は

葬送の時打ぶ鳴らす鐘。parting は「死ぬる」「逝く」といふ意味。lowing herd は「鳴つてゐる牛の群」。low は牛の鳴き聲にいふ。herd は形は單數形でも複數の意味に用ゐてある。従つて動詞は wind をあつて winds としてない。wind は「あちちへ行つたり、こちちへ行つたりして歩む」の意。over は over の音節を一つ短くするため省略形。lea は牧場(meadow)の意であるが、これは詩語 plowman は農夫、耕夫。plods his weary way は「疲れてこぼ／＼と道を歩む」の意。weary は人に冠する形容詞を移して人の歩む道に冠してあるが、修辭學に所謂 Transferred epithet といふもの。最後の行「天地を闇ミわれに殘す」とは「農夫が去つたあと」あたりが暗くなつて自分たゞ獨り残つてゐる」といふ意味である。

味氣ないわざこは知りつゝも右の註釋を敢へて施したが、全體の意味がひゞ通りお解りになつたら、もう一度聲を出してゆつくりと讀んでいたゞきたい。讀んでゆくうち意味と音とが相即不離の關係にあることも感ぜられ、意味の強いところは音も亦明瞭で、一行一行が極めてリズム

に富み、音の高低或は強弱がはつきりしてゐることに氣づかれるであらう。即ち各行は何れも弱い音と強い音とが交互に並び、弱い音と強い音とを一つの單位とすれば一行は五單位から成り立つてゐることがお解りになるだらう。英詩の詩形に就いて何等知識の無い人でも、この四行に弱い強い弱い強い音の規則正しい波のあることに氣づかれるに違ひない。この波、これが即ちリズムである。以下多少講義めいて來て恐縮であるが、英詩を眞に味はふ上にさうしても知つて置いていたゞかねばならぬ事柄であるから、リズム及び韻律に就いて大要を述べることしよう。

リズム(rhythm 律動)は強弱、上下、高低、左右、緩急、遲速、明暗、表裏なき、すべて拍節、節奏、間隔を以て萬有一切を支配する玄妙な運動の法則で、大まかに言へば、時間に於ける反復の齊一である。タイムに依つて左右せられる現象でリズムを示さないものは恐らくあるまい。陰陽、動と反動、天體の運行、四季の循環、晝と夜、潮の満干、波の起伏、樹木や枝の動搖、何れもリズムの存在を證明してゐる。

リズムは又われ／＼の身體をも司り、呼吸、心臓の伸縮、脈搏、左右交互の運動なきに存するばかりでなく、言葉の自然の抑揚の中にも現はれる。即ちわれ／＼は強弱、強弱、或は長短、長短といふ風に交互に發聲する傾向をもつてゐる。これはわれ／＼の内性を支配するリズムに従つたものに外ならないので、精神内容が情緒的であればある程、リズムミカルとなり、その様式は明瞭なる。その反対に情緒が弱ければ、それだけリズムミカルでなくなるのである。情緒に押し流された時の言葉は著しくリズムミカルである。しかし日常の會話に於ける言葉にはリズムの様式が左程明瞭ではないが、獨語の形になり、演説中の修辭的な形のものとなるに愈々明瞭になる。散文の中に韻文即ち律動的表現様式に近い形を發見する時には、その中に情緒の要素が伴つてゐるのである。

萬物の中心にある是等の自然的リズムは何れも絶対のもので、客觀的である。即ち人の心によつて感知せられるが、もこ／＼心によつてこしらへられるものではない。しかしわれ／＼がリズムを好む本能は極めて固有のもので、

何等客觀的實在を有しない場合にも、われ／＼の心はリズムを創り出す傾向を有する。かくの如くにしてこしらへられたリズムはこれを自然的又は客觀的リズムに對して主觀的リズムミ稱するこゝが出来る。リズムに就いて相當な想像力を有する者であれば誰でも、全然等しい刺戟の一聯、及びわけても平等の音の連續に勝手な配合をこしらへるこゝが出来るであらう。この能力の存在は韻律の効果を創り出し、又受け容れるための何よりも重要な要素である。この原理は、時計の音を初めは二音をグループとし、それに交互に拍節を置き、次第に音數を増して律動的想像或は記憶の限度にまで及ぼしてゆけば容易に證明されるであらう。そしてこの方法によつて、われ／＼の言葉の音には實際に適用の出来ない程こみ入つた型は勿論、英詩の韻律に使用されてゐるさうなリズムの型をも、想像に於いて創り出すこゝが出来る。われ／＼の律に對する知覺は練習により發達もし、洗練もされるものである。人類の言語は巧利的及び審美的の二つの重要な職能に従ひ、一方實際の用辨の手段として、他方響應、交際及び自己表現なごの手

段として分岐して来たもので、前者に於いてはリズムは重要でなく、大いに消滅し、後者に於いては、それは保留されて世界の偉大な人種の韻律的藝術語の根柢になつてゐる。哲學者はリズムを稱して宇宙の pulse なりと言ひ、古代ギリシヤ人はこれを神の御手のものと言つた。この神秘なりリズムが詩の呼吸であり、その存在の法則である。

韻律 (metre) とは齊一なり、リズムが言語の音に表はれたものを謂ふ。故に韻律を決定するリズムの單位を見出すためには言葉の音の最も單純なもの、即ち一つの綴音 (syllable) に就いて考へる必要がある。換言すれば、一つの詩の韻律を定めるための第一歩は、先づその一行をとり、これをそこに含まれてゐるだけのシラブルに分けることである。

尙、韻律に就いて述べなければならぬことは多々あるが、今はこの邊で打切り、又再び之に歸つてグレイの『悲歌』を読み直すことにしよう。この詩の韻律を求めめるため、其第一行をシラブルに分ける三十のシラブルから成り立つてゐる事がわかる。今アクセントのあるシラブルミアクセントの無いシラブルをそれぞれ、×の符號で示すこゝ、

×、—×、—×、—×、—×、

となつて弱強の綴が五度反復されてゐる。かうしたリズムの time-unit をなす二個或は三個 (英詩に於いては一般に三個以上の時は殆んど無いといつてよい) の綴音の一组を foot (韻脚) といふ。英詩に於いて主として用ゐられる韻脚は次の四種類である。

上昇リズム

(1) Iambus [抑揚格] (×、) (例 'begin, alone, tonight)

(2) Anapest [抑々揚格] (××、) (例 'disappear, to permit)

下降リズム

(3) Trochee [揚抑格] (、×) (例 'gentle, talk to)
(4) Dactyl [揚抑々格] (、××) (例 'merrily, after the)

尙この外に準韻脚を稱するものがあるが、次回に述べることにして、ここで又三たび『悲歌』に歸つていたゞきた。各行何れも上昇リズムで、抑揚の韻脚五個から成立つ

てゐるから、この詩の韻律は専門的に言へば iambic pentameter (抑揚格五韻脚) である。リズムは耳によるのであるが、眼についていへば丁度壁紙の模様のやうなもので、整然と草花の模様が繰返されて一つの型を成してゐるのと同じである。『悲歌』の四行もその第一行の反復で(一行が既にフットの反復であるが)又この詩全體三十二節もこの四行の反復に過ぎない。故に一篇の詩のリズムは韻脚(foot)に發して詩行(verse)となり、何行かを集まつて節(stanza)をなし、そして全體を構成するのであるから、學者によつては第一の單位、即ち foot を第一リズム、詩行を第二リズム、節を第三リズムと名づけてゐる者もある。その三つの者は緊密に關係してゐて、第三リズムを成すには第二リズムの組合せに更に技巧があつて、行末の音を一致させ、ここに漢詩にみるやうに、押韻といふものが生ずる。『悲歌』の場合では day の way、lea の me が互に照應して微妙な調和を保つてゐる。

以上はリズム及び英詩韻律の概要である。尙詳細は次回に於いて述べることにする。

日の入

一

お日さま

だんだん低くなつて、

お家へかへるわ、

ごらんさい

かへりさうだわ。

二

あれ火ね、

お山の向ふ側、火ね、

お山、燃してるの？

(三歳四ヶ月兒の自由詩)